

北川興業(株)  
代表取締役

PICK UP

THE PERSON

# 北川 誠

KEY WORD

命

— inochi —

「足場は、作業員の命を守る大切な土台」。

『北川興業』の北川社長は、対談の中で熱を込めて話した。

10代のころから長年業界一筋で歩んできた社長は、

足場工事という、「職人たちの命を守る仕事」に誇りを持ち向き合うようになった。

そんな中で、信頼を置く恩師の事故死を受け、

「より安全な現場を提供し、一人でも悲しむ人、傷つく人をなくしたい」と決意。

その思いを芯に独立を果たし、「人命」を守るため、安全第一の職場づくりに尽力、

「誰もが安心して働ける業界を作りたい」との展望を見据え、情熱を注ぐ日々だ。



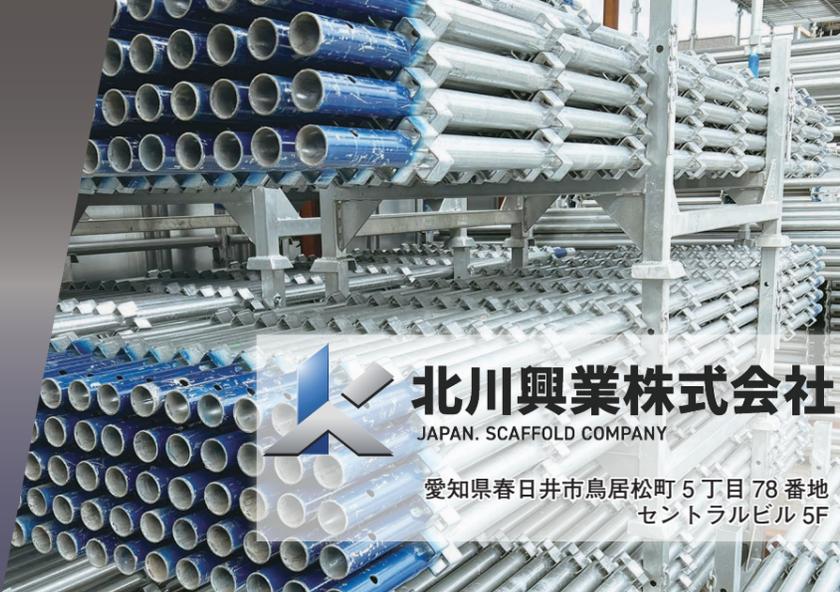
「経営者として、働く皆の命を守る。  
これが私の責務であり、使命です」



## 北川 誠

代表取締役

愛知県春日井市出身。母子家庭で育ち、生活は厳しかった。ままならない暮らしの中で、中学に入ると荒れるようになる。14歳の夏からお金のために足場仮設工事の現場で働き始める。21歳の時、仕事中の交通事故で大怪我を負うも、根性で復活。26歳の時、尊敬していた恩師が現場の事故で急逝。それを機に独立を決意し、27歳で個人事業として起業、29歳の時に法人化を果たした。現在は安全な足場づくりを通じ、誰もが安心安全に働ける環境を全力で提供し続けている。



## 北川興業株式会社

JAPAN. SCAFFOLD COMPANY

愛知県春日井市鳥居松町5丁目78番地  
セントラルビル5F



# 安全、安心な足場づくりりに全力投球 「命を守る」足場を提供する職人集団

全国をエリアに、足場仮設工事を請け負っている『北川興業』。建物の高低を問わず、特殊建設用や建築用足場といった工事も行っている。同社の北川社長は10代のあるから業界一筋に歩んできた人物。「危険が伴うからこそ、何よりも安全第一に、誰もが安心して働ける環境づくりを」との強い思いで事業に邁進する社長のもとを、タレントの野村将希氏が訪問。その情熱の芯に迫った。

――まずは北川社長の歩みから伺います。

私は母子家庭で育ち、母は病気がちで生活は困窮していました。幼いころは陸上自衛隊に入って国を守り、人助けをすることが夢だったんです。ですが実は、かなり荒んだ思春期を過ごしまして。中学に行っても悪いことをしてばかりしていて、先生方も手に負えないとでもやんちゃな生徒だったんです。それで、ろくに学校に行かず……14歳の夏から働き始めました。とにかく働いてお金が欲しかったんです。なんとか学校側に配慮してもらい、卒業証書は貰いましたが（苦笑）。

――14歳で働くことを決意されたとは、相応の覚悟だったでしょう。では、社会に出られた第一歩はどのような道へ？

足場工事の仕事です。特に関心があったわけではなく、どちらかというと町中で足場に登って作業をしている職人さんを見かけても「あんな高いところに登るなんて怖いな」といったイメージしかなかったんです。知り合いにこの仕事を紹介された時にも、ただ「建設業だよ」ということしか聞かされておらず、まさか自分がこの現場にいるなんて、と。（苦笑）しかし、生活のため、無我夢中で働きました。

――そこから、独立に至った経緯とは？

勤めていた会社の専務であり私の恩師である方から「お前は独立したほうがいい」と独立を勧められたんです。しかし、当時の私はなかなかその一歩を踏み出せずにいたんですね。そうして26歳を迎えたある日、その方が現場の事故で突然亡くなってしまったんです。

――衝撃で言葉も出ません……。現場はどんな状況だったのですか？

私は別の現場にいたのですが、後から事故当日の状況を聞きますと、マンションの足場の解体中に、10階の高さから落ちた資材が頭に直撃したんだそうです。即死だったと……。どうしてそうなったんだと確認したところ、朝礼のミーティングが不十分で現場の流れに関する作業員への周知が行き届いていなかったこと、人員配置のミスから不安全な環境が生まれ、不安全行動に繋がったことなどがわかったんです。「自分が手掛けた仕事で、人の命を守る」。18歳のころからその思いで仕事を続けてきましたが、この出来事によってまた大きな心境の変化がありました。恩師のような事故を、二度と繰り返してはならない。より安全、安心な建設業界にしていこうと決意したんです。それが最後に感謝の気持ちも言えずに逝かれてしまった恩師への弔いになると思いました。

――それでついに独立を決められたと。

はい。勤めていた会社を退職し、同業他社で5カ月ほど経験を積んだ後、「北川興業」という屋号で個人事業の届けを出しました。その後2018年に株式改組をして現在のかたちとなりました。

――社長の活躍に、きっと恩師の方も喜

――ここから、社長の職人人生がスタートしたわけだ。では、働く中でだんだんと仕事への思いも変わっていかれたのでは？

そうですね。仕事に対する意識が大きく変わったのは18歳の時でした。自動車免許を取得して、トラックに乗って初めて親方として現場に行った時のこと。ふと「私が組み立てた足場で一体何人の職人さんが作業するのだろうか」と思ったんです。仮に10人だとして、その一人ひとりに家族や友人、恋人などがいるはずなんです。もし事故が起きて「その誰か」に何かあったら、10倍、100倍の人たちが悲しむことに気づいたんです。「自分の手掛ける仕事は人の命を預かっている」。そう捉えるようになってから、安全な足場を組み、職人さんが無事に現場を納めることが、お金を稼ぐ以上のやりがいや喜びに変わりました。

――足場無しには安全かつ質の高い工事は成り立ちませんかから、業界を下支えする、重要なお仕事ですよね。

そうして仕事に邁進していたのですが、21歳の時に自分自身が交通事故で大怪我を負ってしまったんです。医者から「全治1年。治っても、仕事に復帰するのは不可能でしょうね」と言われた時はショックで全

んでおられるでしょう。

そうであれば嬉しいです。あの事故以来1年に1度は必ずお線香を上げ、恩師の墓前に仕事のことを色々話しているんですよ。改めて思うのは、初心を忘れず、日々勉強そして精進して行く志です。今でも、建設現場の事故に関するニュースを目にする心臓がグツと痛みます。そのたびに「もっと、もっと安全な足場、そして業界づくりを推進していきたい」と思いを強くするんです。どんなに完璧な現場でも、絶対はありません。誤解を恐れずに言えば、事故を100%無くすることは不可能かもしれませんが、でも、1%でも事故を回避できれば、そしてそれらを積み重ねていけば、限りなくゼロに近づけることはできると信じています。大事なのは作業員一人ひとりの意識だと思っていますから、私は従業員の皆には常に「充分だろう」という甘い意識ではなく、「まだ足りないかもしれない」という発想で常に安全対策には念を入れて仕事をしたい、と徹底して伝えています。

――お仕事の上で、安全で安心な環境をつくっていく。それも、経営者の一つの使命だと感じますよ。

経営者となり、安全な業務の追求のために、努力を重ねる日々です。高所作業を含むこの仕事は常に死と隣り合わせ。朝「行っけます」と家を出て、夜になれば「ただいま」と帰って来ることは当たり前のことではないんです。私の一番の使命は、この業界で働く皆が大切な人に毎日「ただいま」と言えるようにすることだと思っています。安全な足場づくりが最大の任務。そして次世代、未来へと、安全安心な社会が受け継がれるようにしたいと願っています。

## 野村 将希

タレント



「何よりも『命』を守ることを大切に事業を進めておられる北川社長の熱い思いに感銘を受けました。社長は将来について『売上5億円を目指す』とも仰っていて、ますますのご活躍が楽しみです。目標を果たされたら、ぜひ美味しいご飯をご馳走さしてください。男の約束を果たす日が来ることを、心待ちにしております。頑張ってくださいね！」

――言葉が出ませんでしたね。

――それはおつらかったですか？

今まで必死に仕事を覚え、やっと自分の生きがいや居場所を見つけ、人から必要とされる存在になったのに、ここで諦める訳にはいかないと思いました。やれるだけやってみようと思いましたが、歯を食いしばり、汗だくになりながら乗り越えてきました。その甲斐あって、おぼつかないながらも3カ月で仕事に復帰することができました。

――おお……。社長はガッツのあるお人だ。普通ならここで諦める人も多いでしょう。

## 背中を押してくれた、もう一人の存在

- 北川社長が独立を決める前、信頼を置く恩師から「お前ならやり立ても必ずやっつけられる」と言われたそう。実績も人望もある恩師からの激励は、昨日のことのように覚えていると社長は話す。しかし、当時は独立を勧められても最初の一歩を踏み出せないでいる自分がいた。
- 独立を躊躇っていた矢先に恩師が急逝し、独立への覚悟を強くしたという社長。そんな社長に奥様は「私も一緒に落ちるところまで落ちるから。そうしたらまた一緒に働けばいい」との言葉をくれたそう。この奥様の言葉も、独立への後押しになったと社長は当時を振り返り感謝する。
- 奥様に社長の印象を伺うと「夫はとても真面目な人だから、見えないところで努力していると思う。家族のために働いてくれて、感謝しています」と微笑んだ。努力家の社長を支える奥様の存在も、社長の原動力になっているのだ。

